時代の重み、経験の重み。確かにそれは、はかり知れまい。

KYOTO Technical Site

取材・文／竹中　聡（本誌）

言葉遊びではない、人の重み、命の重み。

狗頭の神、アヌビスが死者の心臓と羽根を秤にかけ、死後の審判をする…。その企業の資料室の一等最初に掲げられているのは、創業当時からの製品の数々ではなく、エジプトの有名な古代文献「死者の書」の写真であった。人の命や罪の重さを量る、といった「はかり知れない」ものを量ろうとする画は、なかなかに洒落が効いている。

というのは、その企業は流通用ハカリの国内シェアがおよそ30%、自動計量用ハカリにいたっては世界シェアの60%を占める計量システムメーカー「株式会社イシダ」であるからだ。「秤を造ってる会社って、どこがある?」。一般的にはそんな会話も少なかろう。希少な企業ではある。

長さより、体積より、重さの単位が、早かった。

そもそも、現存する最古の秤はエジプトで発掘された物で、紀元前5000年頃のもの。起源は定かではないが、日本への伝達は、中国経由で約1400年前とある。

この秤の歴史というのが結構面白い。様々な文化が中国から伝来しているが、長さや体積より、「重さ」を量る事が最も早かったと言うのだ。つまり、「ものさし」よりも「升」よりも、「秤」の伝達の方が先だった。中国では秦の始皇帝が度量衡を統一しており、日本では大宝律令で度量衡が整えられている。

今で言う貨幣偽造か。秤の偽造の、罪の重さ。

何故、重さが最優先であったか。それは年貢の徴収の際に統一の単位が必要であったから。貨幣経済以前、重さは国の経済の根幹を成すものであったということだ。後に貨幣経済が浸透し、江戸時代、天下太平の世になっても、貨幣価値の礎を量るものとして、秤の扱いは別格であり続けた。秤の製作、販売、修理に関して、幕府が完全に統制を取っており、江戸の守随氏と、京都の神氏の両家にのみ独占権を与えていた。秤座。いわゆる「座」のひとつである。「にせ秤こしらえしもの引廻しの上、獄門、但し、掛目に違いこれなきにおいては中追放」。今で言う貨幣偽造と同罪と考えれば解りやすいだろうか。重罪である。

言わば「座」の近代的継承。それが創業の経緯。

さて、ここでようやく同社の話になる。創業明治26年。今年でちょうど創業110周年の節目となる。明治政府になり、欧米に倣った近代的度量衡法が施行されてからも秤の重要性は変わらず、度量衡器に関しては免許制が採用されていた。その頃既に種油などを扱う事業家として成功し、府会議員の職にあった創業者・石田音吉氏は地元、京滋の名士であったという。何故彼のもとにその要請があったかは定かではない。だが政府からの要請で、旧秤座の職人らを一手に引き受け、各人（店）が製造した衡器を一括して販売したのが創業の経緯だ。社訓が「義を見てせざるは勇なきなり」。とは聞いていないが、「利益云々よりも、社会奉仕的な性格が強かったと聞いています」と広報室室長の松村清隆氏。直系の男子が代々受け継ぐその企業精神は、今も社風としてあるという。

お上の代わりを、引き受けたようなもの。

さてここで、一段目のシェアの話に戻ると合点がいく。製品自体、もともとが独占的に生産されていたものなのだ。独占権が与えられたわけではないものの、要はお上の代わりを当時の民間企業が務めたようなものである。創業の経緯は、今思えば僥倖だったかも、というと意地悪に過ぎようか。

とは言え、完全に自由経済となった現代では話は違う。新規参入を止めるお上はもういない。実際、第二次大戦後の物資のない時代は、接収した金属原料を抱える軍需産業が武器を作れなくなったために平和産業の衡器製作業に参入し、逆に原材料の配給が乏しい同社は危機を迎えている。松村氏は言う。「社史の編纂などをしていますと、いやもう、歴史の中ではいつ潰れてもおかしくない危機が何度もあります（笑）」。だが高いシェア

C.

B.

E.

D.

「モリタ屋」

明治2年に京都で初めて牛肉専門店を開業した老舗。川床では「すき焼き」「しゃぶしゃぶ」「オイル焼」3つのコースよりお選びいただけます。

「豆水楼」

豊な旨味を持つ国内産大豆と天然水で仕込んだ自慢の豆腐を使った京料理のお店。
川床では女性に大人気の「豆腐懐石」をお楽しみいただけます。

「めん坊」

京懐石から各地の郷土料理まで多彩な味が楽しめるお店。
川床では「納涼会席料理」(本格さぬき手打うどん付)をご賞味いただけます。

期間 2003年9月30日(火)迄

料金		
	ツインルーム (2名様1室)	12,500円
	トリプルルーム (3名様1室)	10,500円

※表記料金はご宿泊・朝食・各店でのご夕食・サービス料まで含みます。(税金別)
※雨天の際はお部屋でのお食事となる場合がございます。ご了承ください。
※各プランとも＝表記料金はお1人様料金です。ご予約は2名様以上でお申込み下さい。
※写真のお料理は期間中変更する場合がございます。
※お飲物、追加お料理等の精算は現地にてお願い申し上げます。
※土曜日・祝祭日の前日のご宿泊は表記料金よりツインルーム各1500円増、トリプルルーム各1000円増となります。
※7月16日・8月16日のご宿泊は除きます。

<ご予約　お問い合わせ>
宿泊予約係 Tel.075 223 8489

50種類から選べる浴衣お持ち帰り！
「ゆかたDEきょうと」プラン
1泊・朝食付 (2名様部屋)
お1人様 ¥12,500 (サービス料込)
※浴衣・帯・下駄・巾着はお持ち帰りいただけます。

河原町三条
京都ロイヤルホテル
〒604-8005 京都市中京区河原町三条上ル Tel.(075)223-1234
URL http://www.kyoto-royal.co.jp

株式会社イシダ

京都市左京区聖護院山王町44番地
☎075・771・4141
http://www.ishida.co.jp

同社の4Fにある展示室には過去の製品などが並んでいる。その資料室入ってすぐに掛かるのが「死者の書」のコピー。創業100周年となる'93年に、株式会社石田衡器製作所から「株式会社イシダ」に社名を変更、今年で創業110年を迎えた。

と共に生き残る。その理由は企業努力と「代わりのいないプロフェッショナル」として、長年培った技術と伝承される理念。これに尽きよう。

目に見えもせず、手にも取れない企業か？

一般消費者が、その存在を知らない企業・メーカーの類は多々ある。例えば商品としての「自動車」は目にしても、「エンジン内のボルト」を見ることは少ない。市販されない業務用製品ともなればなおさらであろう。そもそも「量る」という作業は、製品そのものにはなり得ない。エンドユーザーの目に触れない企業。同社もその類と見る向きも多いかもしれない。ところが、どうやらそうでもないらしいのだ。

あのラッピングも、あのバーコードも。

長年培った技術とノウハウに裏付けられたシェア。そのリライアビリティ（信頼性）は、現在の商品の多様化を生む。スーパーなどで見られる精肉や魚介類がパックされたトレイ商品。これはどなたでも一度はご覧になったことがあるだろう。最近では特に、食品の栄養素などの詳細な表示、さらに同じラベルに刷られているバーコード。このPOSシステムに直結する値付ラベルの貼付機器も同社が製造しているというのだ。それ以前にトレイをラッピングする技術、多くのスナック菓子の類や野菜の袋詰技術などなど、同社には包装全般の技術があり、業界内では数多く利用されているという。

こうなると話は俄然変わってくる。我々はその商品を目で確認し、手に取っている。見ることも、触れることもできるのだ。「重さを量り、包装し、値段などの情報を貼付する」。それぞれに専門メーカーがあるものと思って話を聞いていたので、所々話のつじつまが合わない。「いえいえ、全て弊社でも開発しています」と答えられて腑に落ちた。考えてみれば一連のラインに組み込むべき工程である。さらに「安全検査をし、箱詰め」までも同社は扱う。言ってみれば「ハカリの周辺システム機器」の開発。「計量による経営情報化という縦軸の他に、このようなシステムの横軸が増えてきていますね。それらを包括する円が弊社の国際化という事になるでしょうか。図にすると某製作所さんのロゴのようですが（笑）」。

これも社会奉仕的…というと嘘になるけど。

これは単純な多角化経営とは明らかに一線を画したもので、何しろ専門的な機器ゆえに、必要とする者が頼るべき業者は多くはないのだ。だからニーズに応える。創業者の社会奉仕的な性格をここで現在の経営方針に重ねるのは、さすがに美談に振りすぎかもしれないが、「やはり『こういう機械を造ってくれ』というお客様のご要望があれば、『顧客第一』『現場第一』ですから、造らないわけにはいきません」と説明を下さった松村氏の表情は、商売人のそれではないように見えた。

取材に際して、「まとめてみたんですが…」と差し出されたのは、自社の経歴ではなく、秤そのものの歴史だった。創業110周年という年であるにもかかわらずである。目に見えない企業。正確には目に見えないと思っていた企業なのだが、「弊社は弊社は…」と出しゃばらない、この裏方気質のようなもの。社風とはこういうことを言うのか。なかなかに興味深いものだ。「量ってみたく」なるほどに。

A.

A.創業者、石田音吉氏。B.明治26年9月発行の「大日本度量衡全書・度量衡器製作者修覆者名簿」＝「秤を造ったり直したりしても良い人名簿」の左から7行目に「石田音吉」の名がある。C.片側にザル、片側に分銅を配した棒秤は、創業当時の製品。D.大正13年改築後の社屋。現在も東大路丸太町下ルの同じ地に本社がある。E.昭和47年、世界初のコンピュータスケールを開発。複数の計量ホッパーを備えることにより、同一重量の袋詰め計量を可能にした同社のエポック。F.そのコンピュータスケールは昭和56年、西ドイツ（当時）のデュッセルドルフで開催された「インターパック'81」に出展され、世界各国から「モンスター」と呼ばれる画期的な製品となった。現在も同社が世界の60%のシェアを誇る